



初めましての人は初めまして、編集部の小海です。「サークル万華鏡」は組合員が学内でやっている活動にフォーカスする取材記事で、今回は昨年度5月号ぶりとなります。特に新入生の皆さんは今頃気になるトピックでしょうし、そのほかの皆さんにとっても普段関わることのない人の活動を知ることができる、そんな記事になっています。このように本誌には特定のジャンルの記事に名前とアイコンを設定しているの、ちょっと気にしてみてくださいね。それでは本編です！
(執筆：小海、撮影：ノノ・小海)



Kyoto University Musical Company Curtain Call

2023年11月始動、今まさに成長中！

昨年12月8日、京大唯一のミュージカルサークル「カーテンコール」の初めてのホール公演が催されました。今まさに注目のサークル。その発足から冬公演、そして将来のことまで、濃厚なインタビューを含む合計3回に及ぶ密着取材を通して、この劇団の全貌を解き明かします。※取材は2024年11月～12月に行いました。

一般的にカーテンコールとは、演劇などの舞台終演後に出演者が舞台上に再登場して挨拶をし、観客はあらためて拍手や声援を贈るものです。

連絡先はこちら！
X : @kyodaimusical
Instagram : @kyodaimusical
Gmail : kyodaimusical@gmail.com

(理・院 Coupe)

(これ読んだ人今日から「りしゅとろ」やで；編)

はみだし
すてーじ

履修登録ってどうしますか？ わたしは「りしゅとろ」です。
⇒中トロとか、とろさーもんみたいでかわいい!! 採用!!

初めての冬公演『夢から醒めた夢』

読者の中にはミュージカルを観たことがないという方もいるでしょう。ミュージカルは通常の演劇に歌・踊りが加わり、これらのパフォーマンスを総合した舞台です。分かりにくい方はディズニー映画を想像してください。2024年冬公演は醍醐交流会館で開催され、カーテンコールによって初めての本格的なホール公演、また2024年度の新歓公演に続いて2度目の本番となりました。緊張の中開けた幕は、役者の皆さんの思いがピンピン伝わってくる、圧巻のステージでした。お客さんも満席。終演後のロビーには充実した表情のお客さんや団員さんの姿が見られました。

その演目『夢から醒めた夢』は劇団四季オリジナルのナンバーです。天真爛漫な少女「ピコ」と交通事故で母を遺し亡くなってしまった少女の幽霊「マコ」の出会いから物語は始まります。



終演後にパシャリ



▲全体でのダンス練習

壁に手を当て発声練習▶

後ろから真剣に見つめる。台本、動画などを確認し、指示を出します▶

練習のようす

(2024年11月27日取材)

5限終わりの18時半、だいたい人が揃ったところで始まりの挨拶。そのままウォーミングアップに移ります。「あ！ え！ い！ う！ え！ お！ い！ う！ あ！」腹式呼吸や母音の発声練習などを済ませたら今日は全体でのダンス練習をメインに進めます。



団員さんにお話を伺いました



青島さん
(1期生・ピコ役)

——カーテンコールに入ったきっかけは？
昨年12月に劇団四季にそれはもうドハマりしたんですよ。で、ちょうど11月に『夢から醒めた夢』を四季がやっていたのを観て初めて「やってみたいな、そういえばサークルとかあるのかな」とツイッターを調べたら2日前にできたばかりのアカ

ウトを見つけ(笑)「やるしかない！」と思ってDM送りました。
——運命じゃないですか！ もしかして今回の演目は……？
私がゴリ押ししました(笑)。私がミュージカルやりたいって思ったのは『夢醒め』がきっかけなので。
——印象に残っている活動は？
ホール練かなあ。『夢醒め』を練習し始めた時点で、本当に完成するのかビジョンが全然見えなくてずっと不安だった。でもホール練の時、初めて0から作り上げられた感じがして、私たちが何かできるっていう実感が湧きました。
入ったばかりの頃は、創立した方たちはそれなりのビジョンを持っていると思う

んですけど、その側と外からきた側の擦り合わせが難しいだろうなって。他の団体がやってることをなんでもそのまま取り入れられるわけでもないし。最初は話し合いばかりだったけど、それは濃厚な時間だったなって思います。
——これがあるから頑張れる、みたいなものはありますか？
うまく歌えた、演じられたっていうのはもちろんやりがいになると思うんですけど、一番は多分、この集団への愛だと思います。みんなとやった成果を満足いく形に結晶化できたことが何より嬉しいですね。

はみだし
すてーじ

今日(12/3)誕生日なので祝ってください

⇒Happy Birthday to you!! mskさんおめでとうございませう!! (今日も誰かの誕生日！ あの～、個人的に超一押しパースデーソングがあるんです。ドリカムのHAPPY HAPPY BIRTHDAYっていうんですけど……よかつたら聴いてみてね、皆さんに捧げます；編)

(工・1 msk)

代表の方々にインタビューを行いました！

(2024年11月28日収録)

はじまり

—お三方は今までミュージカルやっただことありましたか？

一同：ないです。

小野塚：観る側としても今ほど思い入れがあるわけじゃなかった。

—ほんとですか!? やろうと思ったきっかけって……？

梅林：『ハイスクールミュージカル』という作品があって、それにドハマリした時期があるんですよ。散々観て「うちらでもやりたいな」って言いだしたのがきっかけでした。それが去年の10月。別のサークルの友達の内田さんって子に話したら「私もやりたいかも」ってことで小野塚くんを呼んで、3人で人を集めようとなりました。奥山さんはライリスの後昼ご飯食べながら勧誘したらノッてくれて。

奥山：めちゃめちゃ盛り上がりってね。私が勧誘された日にXアカウント作って。

梅林：そしたら私が声かけた人と合わせて20人くらい集まっちゃった。たまたま私の周りでたくさん集まったので私が代表になって。

—以前から立ち上げ計画を温めてたわけじゃないんですね。

梅林：そうなんです。やりたい！ で気付いたらサークルになってた。

—そこに戸惑いとか躊躇はないですよ。



奥山さやかさん(マコ役) 梅林花帆さん(デビル役) 小野塚祥峻さん(夢の配達人役)
カーテンコール代表

小野塚：いけると思っていました。でも何も分からなかった。

梅林：最初はグダグダでした。

—とりあえず担当は決めるけどノウハウはないってことですね。

奥山：踊れたり、脚本書けたりする人はいるんですけどそれを一つのミュージカルにしたことある人がいないんです。結局それは皆でやりました。

小野塚：公演を打つにあたっての事務や、そもそも組織を運営する方法を何も僕らは知らなくて。

奥山：それぞれ思い描いてるものがあるって、どこに行くんだろうって。

梅林：別の劇団に属されてる方もいたんですけど、私たちの試行錯誤ぶりが見ていられなかったみたいで降板するとか、長文であれこれ言われたりね。

良いアドバイスだったんですけど、あれは苦い薬でした。普通なら運営を考えた上で立ち上げると思うんですけど私たちは逆で。お金も練習もちゃんと

してないって結構言われる中で、それ

でも新歓公演に辿り着いて、2期生いっぱい入ってくれて万々歳です。

奥山：それまではひたすら組織の基盤作りね。人が来ない、ガタガタだねって言いながら「なんで来ないんだろう」って。

小野塚：ずっと話し合っていました。梅林：今も話し合いはしていますけど、おかげで週に何時間も話し合うということはなく、でも、お互い少しでも何かあれば言い合える、それが今の組織の良いところかな。

—皆で解決していくのがようやく固まってきた感じですかね？

小野塚：その通り。やっと1年。

—2期生もたくさんいらっしやいますね。

小野塚：できたばかりのサークルで実績もないですし、不安はありました。

梅林：え、私なかった(笑)

—突き進むタイプですからね。
小野塚：実績では押せないけど熱意だけはあったと思うし、京大でミュージ

カルやってるの僕らだけやし。
—最初に人が集まったのも、実はやりたいって思っていた人は多かったからかもしれませんね。

ここだから

—嬉しいこと、苦しいことがある中で活動をただ楽しいって言葉で片づけるのは違うような気がしているんです。皆さんがこのサークルでやっていく理由はなんですか？

奥山：みんなミュージカルをやりたいという思いはあるけどそれ以上にこのみんなでなにかやりたいという思いがある気がします。なにかワクワクすることをちゃんとやることに対して躊躇しない。たとえ現実的でなくてもこう、バカにするでもなく何が必要か考えて行動していくのが私は好きです。

梅林：2期生の子もカーテンコール好きなんやなって最近すごい感じて。「note」に練習日記を書いててその中に「居心地がよくて温かいサークルです」って書いてくれたんですよ。

奥山：1期生だけで盛り上がりたかって一抹の不安はあったんですけど。

—その心配はなさそうですよ。2期生に何を思いますか？

梅林：それぞれちゃんとやりたいことを実現して、組織が大きくなっていったらって思います。

小野塚：立ち上げた人がいるとなんか、なにか感じちゃうかもしれない。今僕らの理想像が確かにあってそれに向かっているけど、2期生は2期生で新しいものを追求してほしいよね。

—1期生の理想って？

梅林：そもそも共通してるんかな？
小野塚：確かに。

梅林：自分らからすれば舞台に向けて一生懸命練習する。お客さんから見れば……私四季観て号泣したことがあって、そのレベルまで感動させられたら凄いと思います。

—そっか。それぞれ達成したいものが違っても同じもの作ってるから、舞台ができた時にそれらが同時に達成されている。そういえば「カーテンコール」の由来ってなんですか？

梅林：内田さんが何個か案出してくれてアンケートとって「これだ！」ってなったのがこれ。他に案なかったし。小野塚：今思えば当時僕らが考えてた華やかなイメージとマッチしてたからかな。

奥山：すごい意味があったわけじゃないけど……。

—だんだん意味がついていくのかも。しれませんね。この名前に人が集まって。3期生も来ますし、楽しみです。奥山：こっそり毎公演行きますよ。どこ住んでても行きます。

その先へ

小野塚：僕らの始まりって『ハイスクールミュージカル』だったわけですけど、このドラマが学校の中でミュージカルをやるっていうもので、友達同士で集まって頑張って作って、壁にぶち当たりながら最終的に上手くいく。ずっとそれがいいなと思ってて。

梅林：うちもあれ観てやりたいって言ってたよな。

小野塚：この感動的なシナリオを自分も辿りたいなっていうところがあって。大学でできることって限られてるし、ミュージカルを作るなんてこの先四季に入るでもしないとできないじゃないですか。大学生は時間があって、多少技術力もあって、お金はないけど



▲冬公演カーテンコール
人が集まれば増える。皆で一つ作って達成感を得る場所にカーテンコールがなればって思います。

—それに、四季はもう「四季」がありますからね。

小野塚：そうなんです。一から作って他にない。夏公演の演出は僕が考えているんですけど、「お金があったらこんなことできるのに」がありすぎて、だから四季には絶対勝てない。でも、四季は高いお金を払って美味しいものを食べるようなものだけど、僕らのミュージカルは無料で良いものを観られる。限られたお金で最高のパフォーマンスをする、できるっていうのを追求できたらなって。

—共感する人はいると思います。
小野塚：お客さん目線の理想像はそれで、僕らの理想だったら団結してっていうのが一番の醍醐味かなと思います。自分らのやりたいものが届く組織。挑戦したいことを忘れずにね。意外と自分が思ってる以上のことをできるんですよ。やってみたらできましたから。—今後のご活躍に期待しています。本日はありがとうございました！



▲衣装に身を包んだ終演後に一枚